ある
「負け組科学者」
の
詩集

著者：　江澤　潔
(2020/10/18)

はじめに

これは、拙著、
『ある「負け組科学者」の人生の記録』（パブリック・ドメインで提供中）、
のいわば付録の一つである。

私の人生に起きた出来事が「何故起きたのか」の背景となるべく、
当時の状況等については上記拙著でできる限り説明したつもりであるが、
もう一つの背景となるべく、様々な物事に対しての私の考え方については
あまり説明できなかった。
その後者を伺い知る「手がかり」として、ここに、対となる二つの付録、

『ある「負け組科学者」の随筆集』
および
『ある「負け組科学者」の詩集』

を、やはりパブリック・ドメインで提供する。
（これはそのうちの一方である。）

読んで頂けると解ると思うが、それぞれ、かなり異なる性格を帯びている。
それは、私の頭の中には**「二人の善人」**が住んでいるからである。

一人は、
「隣近所に住む優しいおじさん」的な「善人」で、
（ゴミ捨て等、）地域社会のルールに忠実に従い、
電車やバスではお年寄りや妊婦に席を譲り、
狭い道で他人と鉢合わせすると道を譲り、、、
といった、世間一般で認識される様な、いわゆる「いい人」である。
一方、
もう一人の「善人」は、もっと「上から」「俯瞰的な視点で」
この国全体、人類全体、あるいは地球全体の将来を憂え、
真剣に問題点の解決策を考えている。
どちらかと言うと、地球環境の保全を優先しがちなので、
「母なる地球」（あるいは**「母なる自然」**）**からの「遣い」**
の様に見なすこともできるかも知れない。

問題に応じて、この二人は意見が一致することもあるが、
意見が相容れないことも非常に多い。
その場合、葛藤が生じることとなり、
人によっては、どちらか一方、特に後者、
を**「悪人」**の様に感じることもあるかも知れない。
でも、
それはあくまでも**「立場の違い」**なのだ。
所詮、**「善」「悪」**と言うのは、
ある立場から見て判断する相対的な価値
であって、
「絶対的な善」などというものは、そう滅多には存在しない。

前置きが長くなってしまったが、
「詩集」の方は、日常生活を扱った作品が多いので、
どちらかと言うと前者の立場で書かれた場合が多く、

「随筆集」の方は、社会問題を扱った作品が多いので、
どちらかと言うと後者の立場で書かれた場合が多い。

（ただし、それぞれ、反対の立場から書かれた作品も幾つかある。）

そこら辺を念頭に置いて読んで頂けたら、
人によってはある作品を読んだ後に感じるかも知れない不快感は、
多少は軽減するかも知れない。
[
いずれにせよ、特に「随筆集」を読まれる際は、
あまり感情的にならずに、
あくまでも理性的、客観的に読まれることをお勧めする。
]

また、これら付録で扱った主題は、
私の（かつての）専門である物理学や遺伝学（＆分子進化学）
から外れたものがほとんどであるので、
如何せん、感想や意見が「素人目線」になってしまっているし、
（特に「随筆集」では）事実誤認も多少あるかも知れない事は、
あらかじめお断りしておく。
[**注意：**
そこに書かれた事は、どうか「鵜呑み」にせず、
自分で用いたい場合には予め真偽をご確認なさることをお勧めする。
そうせずに、誰かが何か「被害」に遭われても、
私は一切責任は取らないのでご注意頂きたい。
]
[
とは言え、素人（あるいは部外者）の視点からの疑問やアプローチが
しばしばある学術分野の革新的前進（breakthrough）のきっかけ
となることを考えると、
「素人目線」の意見だからと言ってあまり侮りすぎない方が良いかも知れない。
]

末筆ながら、
私が「人生の記録」やこの付録も含めた諸々の準備に
予想をはるかに超える時間がかかってしまったのを、
辛抱して支えてくれた家族はもちろんのこと、
親類達、恩師達、指導教官達、受け入れ教官達、
上司達、友人達、同僚達、先輩同輩後輩達をはじめ、
この５２年の間のどこかの期間に私を支えてくれた全ての人々に、
改めて、心の底から、感謝の意を表する。

2020/10/18（日）

江澤　潔

目次：詩集（Table of Contents: Poems）

「秋色」って何色？

えざわ　きよし [初稿：2018/12/0; 改訂１：2019/01/21;
改定２：2019/08/31]

「秋色」って何色？

紅（あか）い彼岸花、
ピンクの秋桜（コスモス）、
白に黄色の野菊の花、
オレンジ色の柿の実、、、

あかね色の夕焼け、
金色（こんじき）の満月、
真っ青な秋空、
白いイワシ雲、、、

透き通った秋風、
銀色のススキ、
黄金色（こがねいろ）の稲穂、
コオロギの音色、、、

、、、秋を彩る色達は、どれもこれも美しい、、、

けれど、
やっぱり秋と言えば、
赤や黄色に色づいた
木々や山々を思い出す。

夏が終わり、秋が深まるにつれ、
緑の木山は赤や黄色に「燃え上が」り、
その色あいはどんどん深みを増す。

そして、
色とりどりの木の葉が落ちて、
木山が灰色に変わる頃、
厳しい冬がやって来る。

、、、そう、「秋」とは、つまり、
夏から冬へと移ろい行く季節。
だから、
移ろい行く色こそが
「秋色」と呼ぶにふさわしいのかも知れない、、、

はかなきもの

えざわ　きよし [初稿：2019/01/21; 改定1：2019/01/22;
改定２：2019/03/29; 改定３：2019/05/08;
改定５：2019/12/07&09; 改定6：2020/10/17]

古来より、日本人には
「はかなき」ものを愛（いと）おしむ心がある。

春、一斉に咲いて美しく散る　桜の花、

初夏の夜に、ほのかな光をともしてゆったりと漂う　蛍の群れ、

夏の夜空をパッと彩り、一瞬にして消えゆく　打ち上げ花火、

地面の近くで控えめにパチパチ輝き、１分と保たない　線香花火、

夏の昼、数日限りの命を尽くしてやかましく鳴く　蝉時雨（せみしぐれ）、

夏の夕べをヒラヒラとはかなげに舞う　クサカゲロウ、

秋になると一斉に鳴き出し、冬になる前には止んでしまう　虫の声、

満天の星空をサッと一瞬でよぎる　流れ星、

花びらの様にひらひらと舞い、触れると一瞬で融けて無くなる　春の淡雪、

、、、ああ、どうして「はかなき」物は、
こんなにも我々の心を魅了するのか、、、？

父帝の命（めい）に従い、
西へ東へと「まつろわぬ者達」を平らげながらも、
若くして帰途の伊吹山（？）に散った　ヤマトタケルの命（みこと）、

平家の繁栄の象徴として、
幼くして帝（みかど）の地位に登り詰めながら、
何も解らぬまま壇ノ浦に沈んでいった　安徳帝、

源氏の覇権の奪取に絶大なる貢献をしながらも、
兄に疑いをかけられ、
平泉で若くして散っていった　判官九郎義経、

後醍醐帝に最期まで忠義をつくし、
湊川で多勢に無勢で散った真（まこと）の忠臣　楠木正成

「天下布武」の野望へあと一歩まで近づきながら、
家臣の謀反にあって、
「人生五十年」を全うする事なく本能寺に散った　織田信長、

天下分け目の合戦の前に、

敵方の人質になる事を拒んで
業火の中に気高く散った　戦国の美しき花一輪、細川ガラシャ、

幕末の京都を奔走し、
「天才剣士」と謳（うた）われながらも、
若くして結核に倒れた　新選組の一番隊長、沖田総士、

会津藩の若松城を守る任務が遂行できないと
早合点し、集団自決してしまった　白虎隊、

不遇の生活の中でも夢を捨てず、
作品にすべてをぶつけて早逝していった
明治から昭和の文人たち、

日本の勝利を信じながら、
愛する者達を守る為に、
敵艦へ体当たりしていった　特攻隊の若者達、

優れた文学作品を数多く残し、
この国の行く末を案じながら、
自衛隊駐屯地で自刃して果てた　三島由紀夫、

沢山の若者達の琴線にふれる歌を数多く遺して、
若くして逝ってしまった　天才シンガーソングライター、尾崎豊、

、、、ああ、どうして我々は、
こんなにも「はかなき」者に心惹かれるのか、、、？

、、、何であれ誰であれ、
「はかなき」ものは、「散り行く花の美しさ」を内在する。

それがきっと、
情緒豊かな日本人の心をとらえて離さないのであろう。

「はかなき」ものへの愛着、それは、
日本民族のDNAに刻み込まれた
情緒深さの証（あかし）なのかもしれない、、、

藤棚（ふじだな）の思い出

えざわ　きよし　[着想：2019年５月; 書き下ろし：2020/10/14]

ある初夏の　昼下がり

薫風（くんぷう）に　運ばれて来た
藤の花の　ほのかな香りが
あの　「古き良き日々」の
記憶を　呼び起こした。

私が　まだ小さかった頃
玄関先には　藤棚があり
この季節になると
白や　薄紫の　花が
連なって　垂れ下がり
ほのかな　いい香りを　漂わせていた。

そして、
モンシロチョウや　クマバチなどが
蜜を求めて
花から花へと　飛び交っていた。

藤棚の　脇には　モミジの木が　そびえ、
その木に上って　藤棚越しに眺（なが）めた
秩父連山は　いつもと違って見えた。

更にその脇の　広い軒下では、
夕立が降れば
近所の子供達が　雨宿りし、
おやつ時（どき）には
祖母が　ずりあげ＊　やきてん＊＊　ぶたまんじゅう＊＊＊
等のおやつを　作って食べさせてくれた。

その後　家が改築され
藤棚も　姿を消したので
あの光景は　もう二度と　見ることが出来ない。

しかし、
あの　「古き良き日々」の思い出は
祖母が作ってくれた　あのおやつの　素朴な味わいと供に
私の胸の奥底に　今でもしっかりと　刻み込まれている。

＊（ずりあげ）手打ちうどんを釜揚げしてすぐ、水に晒さずに、お椀に入れて醤油や削り節（あるいは味の素少々）をかけて混ぜたもの。うまい。

＊＊（やきてん）お好み焼きを薄っぺらくした様な、あるいは韓国のチヂミの様な食べ物。具としては、刻みネギ、小エビ、刻みキャベツ、まれに刻みハムや刻み紅生姜、等々、が入っていた気がする。（確か、ニラは入ってなかった。）これもうまい。

＊＊＊（ぶたまんじゅう）やきてんの材料（ちょっと固め）に豚のひき肉、あるいは代わりに納豆など、を加

えたものを楕円形に固めてアルミホイルで包み、確か七輪か落ち葉焚きの中で焼いたか、もしくは炊飯器の中で蒸したかしたもの。これもまたうまい。

紫陽花（あじさい）

えざわ　きよし　[着想：2019年6月; 書き下ろし：2020/10/14]

風薫る季節も　過ぎて
僕の大好きな　花の季節が　やって来た。

日本でも　最も雨がちな
この季節に咲く　この花は
色鮮やかで　ありながらも
その色合いは　あくまでも目に優しい。
この花を　描くとするならば
油絵よりも　水彩画の方が　似合いそうだ、
などと思うのは　僕だけだろうか？

この花は　どういう訳か
庭や　空き地の
奥まったところに　よく見かける。
ギラギラとした　真夏の太陽の下
これでもか！　というくらいに
自己主張している　ヒマワリの花等（など）とは　対比的な、
この花の　奥ゆかしくて
慎（つつ）ましやかな　佇（たたず）まいが
僕は　愛（いと）おしくてたまらないのだ。

この花は　打たれ強い。
どんなに　雨に　打たれても
どんなに　風に　吹かれても
この花は　じっと堪（こら）えて
健気（けなげ）に　咲き続ける。
、、、まるで、
上司や顧客の　「しごき」に
日々　耐えながらも
一生懸命　働き続ける
我々庶民　の様に、、、。

この花は　かなり長い期間　咲き続けるが
その間に
うす緑　白　青　紫　赤　と
様々な色を　見せてくれるので

見る者の　気持ちを
飽きさせる　こともない。
、、、どこまでも　他人思いな　花なのだ、、、。

自然豊かな　この国では
四季折々に　種々様々な　花が咲く。

その中でも　特に美しい　桜の花は
多くの国民に　愛されているが
「庶民の花」　と呼ぶには
あまりにも　華やか過ぎる。

秋に咲く　菊の花も
凛（りん）として　美しいが
あれは　あくまでも
天皇家の　花である。

美人に　よく例えられる
芍薬（しゃくやく）　牡丹（ぼたん）　百合（ゆり）の花も
なるほどさすがに　美しいが
我々庶民には　いささか「高値の花」である。

、、、僕には　思えてならないのだ、、、

この　日本で最も潤（うるお）いある季節　に咲く
色鮮やかながらも　慎（つつ）ましやかな
この　紫陽花（あじさい）の花　こそが、

日本の　湿潤な風土と
庶民の　他人を思いやる気持ちを　象徴した

「日本を代表する花」　なのではなかろうかと、、、。

天からのご褒美（ほうび）

えざわ　きよし　[着想：2020年8月; 書き下ろし：2020/10/14]

八月の　とある昼下がり

ベランダで　洗濯物を　干していると
虹の様に煌（きら）めく物体が　飛んで来た。

目を凝（こ）らして　よく見ると
それは　玉虫だった。

私はこれまで　生きた野生の玉虫を
生（なま）でお目にかかった　記憶がない。
（仮にあるとすれば、それは恐らく
縁日かデパートで売っていた「囚われた」ものであっただろう。）

それが今、
こうして目の前で　飛んでいるのだ！！

、、、これはきっと　天が私に
今まで頑張った事への　「ご褒美」を　下さったのであろう、、、。

この　美しい天女の様な　神々しい生き物は
煌（きら）めきながら
ゆっくり　まっすぐ　飛び続け
やがて　桜葉の茂みの中に　消えていった。

、、、この光景は　私の胸の中に　永遠に刻まれ続けることだろう、、、。

赤ん坊

えざわ　きよし　[初稿：2018/08/24; 改訂１：2018/08/25;
改定２：2020/10/17]

ある昼下がり
お隣から赤児の泣き声が聞こえてくる

赤の他人なのに
こんなに愛おしく感じてしまうのは何故だろう？

そして、母親の叱る声

お母さん、いつもお疲れ様。
でも、そんなに近所迷惑を心配しなくてもいいんだよ (^_^)

泣くのが赤児の仕事だと
大人は皆　解（わか）っているのだから

涙のUターン

えざわ　きよし　[初稿：2018/12/17; 改訂１：2020/10/17]

ある年の正月、
実家に帰ると母がぎっくり腰になっていた。
いつもは元気な母が大ごとそうだったので
僕は家事をできる限り手伝ってあげた。

最終日、母に別れを告げて帰途につくと、
僕の目から涙がどっと溢れ出た；
まるで、十何年間ずっと押し留めて来た想いを
一気に押し流すかの如く、、、。

、、、ただ、別れが辛かっただけではない；
不自由な母を助けてあげられない、
自分の境遇が情けなかったのだ、、、。

Uターン列車の中でも涙は留めなく流れ続けた。
僕を見た人々は思った事だろう、
「どうして、大の男がこんなに泣いているのだろう？」
と。

それから更に十何年、
あの時の事を思い出すと
今でもなお泣けて来る、、、
、、、もう、母はいないと言うのに、、、

七夕

えざわ　きよし　[初稿：2018/10/08; 改訂１：2020/10/17]

ある初夏、
母が癌を患ったと告げられた。

その七夕の夜、
僕は必死にお星様に願いをかけた。

その冬、
願いも虚しく、母は逝ってしまった。

次の七夕から、
僕はお星様に願いをかけなくなった。

クワガタムシとカブトムシ

えざわ　きよし　[初稿：2018/08/24; 改訂１：2018/08/25]

ある夏の朝早く

アパートの階段を降りていくと
ノコギリクワガタがジタバタしてた
ので拾い上げた

更に降りていくと今度は
カブトの雌がジタバタしてた
ので拾い上げた

近所の立木に留まらせて
いつも通りに散歩を始めた

赤とんぼ

えざわ　きよし　[初稿：2018/08/24; 改訂１：2018/08/25;
改定２：2020/10/17]

立秋を過ぎたある日
どこからともなく赤とんぼが群れて翔んでいた

、、、まるでお盆に間に合わせようと
ご先祖たちの御霊（みたま）を家々に届けるがごとく、、、

なんとも言えぬ懐かしさに
涙が一筋ほほをつたった

蝉しぐれ

えざわ　きよし [2018/08/24 第1稿; 2019/08/31 改定]

夏のある昼下がり
蝉たちがわんさか鳴いていた

空は曇っているというのに、、、

でも、仕方あるまい
奴らは土を出たら数日しか生きられないのだから、、、

奴らは多分、それを肌で感じている

だからこそ残された僅かの間
自らのDNAを残す為に
必死に魂を振り絞って鳴いているのだ。

さあ、セミ達よ、力の限り鳴きわめけ！
そして、見事に「命のバトン」を次世代へとつなげ！！

秋の虫

えざわ　きよし　[初稿：2018/08/25]

日が暮れると
秋の虫の声が心地よい季節になった

そう言えば母が生前
「秋の虫の声は眠りを誘う」
と言ってたっけ

どうやら私も母の遺伝子を受け継いでいる様だ zzz…

カナブン

えざわ　きよし　[初稿：2018/09/07]

あるお昼前
カナブンがベランダでジタバタしていた

人指し指に留まらせて差し出すと
秋空の彼方へ飛んで行った

カマキリ

えざわ　きよし [2019/09/07 初稿]

ある初秋の早朝、路上で
若いカマキリが翅を広げ、カマを掲げて
見事なファイティングポーズをとっていた。

「おいおい、
君は何に対してそんなに威嚇しているんだい？
そんな所にいたら、そのうち車に轢かれてしまうよ、、、」

僕が翅をつかもうとすると、
カマキリはサッと身を翻し、僕の指をカマで鋏んだ。

「イテテッ」

僕は少し痛いのを我慢して、
そのままカマキリを道端の葉っぱの上に置き、その場を去った。

葉っぱの上でもファイティングポーズを続けるカマキリが
僕を見送っている様にも見えた。

すすき

えざわ　きよし　[初稿：2018/11/04]

ある穏やかな秋の昼、
野原で何十もの妖精達が
「おいでおいで」と手招きしていた。

近づいてみるとそれは
秋風にそよぐススキの一群だった。

今夜はきれいな月がみれるだろうか、、、

モフモフ、モフモフ：植物編

えざわ　きよし　[初稿：2018/12/22; 改訂１：2018/12/24;
改定２：2020/10/17]

イヌ、ネコ、パンダ、フェレット、モルモット、ハムスター、、、、
、、、みんなモフモフしていて可愛いね (^_^)

でも、目を凝らしてよーく見回してごらん！
植物にもモフモフしたのが沢山いるんだよ！！

モフモフした綿毛がまるでアフロヘアーの様な、、、タンポポ、

小さい綿毛がいっぱい付いてて、
なんだか得した気分にさせてくれる (^^)、、、ヒメジョオン、

もっと小さな綿毛がびっしり生えてて、
なんだかアワアワしている (^^;)、、、アワダチソウ、

キツネの尻尾（しっぽ）の様にフサフサしてて、
ネコでない僕でもじゃれたくなっちゃう♡、、、ネコジャラシ、

枝先に可愛い毛玉が沢山付いてて、
ついつい頬（ほお）ずりしたくなっちゃう♡、、、、ネコヤナギ、

秋はシュッとして涼やかなススキも
冬になるとモフモフ感が増してくる♡

、、、モフモフした動物達も、
モフモフした植物達も、
モフモフしてない動植物も、

そして僕たち人間も、
同じ祖先から分かれた「親類」達だ！

だから、み〜んな仲良く譲（ゆず）り合って暮らしていこう！
、、、この、限りある地球の上で。

桃の花

えざわ　きよし　[初稿：2019/03/24; 改訂１：2019/03/25]

ピンクの綺麗な花が沢山咲いた
桃の木が一本ひっそりと佇んでいた。

その可憐な姿を眺めていると
中学の頃想いを寄せていた
あの娘の笑顔が重なって見えた。

嗚呼、彼女は今頃どうしているのだろう、、、
、、、平穏で幸せに暮らしておられる事を、私は願って止まない。

”可憐に咲く　薄紅（くれない）の　桃の木に
あの娘の笑顔を　思い浮かべぬ”

武甲山

えざわ　きよし　[初稿：2018/09/28; 改訂１：2018/12/16]

武甲山は秩父市民に馴染みが深い山である。

武甲山からは石灰岩が取れる。
山はどんどんその形を変え、
文字通り「身を削り」ながら地域経済を潤してきた。

山の名は、昔、
日本武尊（ヤマトタケルノミコト）が甲（かぶと）を奉納された
という伝説に基づくらしい。
また、
武甲山の男神と秩父神社の女神が
（まるで七夕の様に）年に一度の逢瀬を楽しまれる機会が
秩父夜祭だという言い伝えもあるらしい。

祭の時、秩父の人口は通常の数倍にも膨れ上がり、
勇壮な山車（笠鉾と屋台）の引き回しと秩父屋台ばやし、
由緒ある御神幸行列、そして色とりどりの花火等で
秩父の夜は京都の祇園祭さながらに盛り上がる。

そして、祭が終わると男神はまた山へ還って行かれ、
それとともに本格的な冬が訪れ、
山は雪化粧した姿で我々の目を楽しませてくれる。

春夏秋冬、休むことなく我々を見守ってくれている、

武甲山は秩父のシンボルなのである。

美の山（蓑山）

えざわ　きよし　[初稿：2018/09/28; 改訂１：2018/10/15]

朝、散歩の途中、美の山が見えてくる。
武甲山ほど高くはないが、
私にとっては思い出深い山である。

私が小さかった頃、山にはアヤちゃん（大叔母の一人）が住んでいて、
よくミヤマクワガタやアオダイショウなどを贈ってくれた。
私自身も父と一緒に山に行ってクワガタやオタマジャクシなどを採ったりした。
アヤちゃんの家では蚕を飼っていて、
蚕が繭を作る様子や卵を産む様子などを観察することも出来た。

今でも美の山を眺めると、
あの頃の古き良き思い出が
セピア色の映像となって心の中によみがえる。

美の山は私の「心のふるさと」なのである。

自意識過剰の詩（うた）

えざわ　きよし　[初稿：2018/12/16; 改訂１：2018/12/19]

ジイシキカジョウ、
JIISHIKIKAJOU、
ああ〜、自意識過剰〜〜〜。

１、
レストランに入ると、ウェイトレスがにっこり微笑みかけて来た。
「ひょっとして、俺に気がなくね？」
ご安心ください、彼女はあなたに気など全くありません！
彼女の「営業スマイル」はただ、
売り上げを伸ばす為の常套（じょうとう）手段に過ぎません。

トイレに行って、鏡の自分とトム・クルーズを冷静に見比べよ！
間違っても、「ストーカー」と疑われない様に、注意せよ！

頭では「違う」と分かっていても、
心のどっかではど〜〜しても期待せずにはいられない。
そんな、男の「哀しい性（さが）」から産まれる「天使と悪魔」達、
それが、自意識過剰！

２、
電車の中でふと斜め横を見たら、一人の女性と目があった。
「ひょっとして、俺に気がなくね？」
ご安心ください、彼女はあなたに気など微塵（みじん）もありません！
彼女がただ偶然、視線を向けた先で、あなたが彼女を見ただけです。

はやる気持ちを押さえつけて、彼女に一歩たりとも近づくな！
間違っても、「痴漢」「暴漢」と騒ぎ立てられない様に、気をつけよ！

心理学のある研究によると、
ヒトは全くランダムなパターンにも意味を見出そうとするらしい。
そんな、可笑（おか）しな「ヒトの性（さが）」から生じる「心理的病魔」、
それが、自意識過剰！

３、
飲み会で暇（ひま）そうにしてると、後輩が酒を注（つ）ぎに来た。
「ひょっとして、俺に気がなくね？」
ご安心ください、彼女はあなたに気などこれっぽっちもありません！
彼女はただ、「気配り」の効く、心優しい女の子なだけです。

踏み止まって、自分にどんな魅力があるか、客観的に「棚卸し」せよ！
間違っても、「セクハラ上司」と訴えられない様に、言動を慎め！

「雨女」や「晴れ男」等の言葉が示す様に、
ヒトは自分の一挙手一投足の
「影響力」を過大評価しがちだ。
そんな、ヒトの「愚かな性（さが）」が造（つく）った「お茶目なモンスター」、
それが、自意識過剰！

[注：誰か、曲をつけてくれ！！ （詩の多少の変更は構わない）]

メダカとカメ

えざわ　きよし　[初稿：2018/12/07; 改訂１：2020/10/17]

メダカ達はせわしない：
水槽をつついたり、
水の流れが変わるとすぐに
やつらは一斉に向きを変えて
同じ方向へ泳ぎだす。

この業界はまるで「メダカの学校」：
新しい流行が始まると、
みんな一斉にそちらへ向かって
先を争う様に「泳ぎ」出す。

のろまな僕は、
その様な競争には
到底勝てない事が解っている。

だから、
僕は「群れ」から離れ、
さながら「カメ」の様に
自分の目標へ向けてゆっくりと
一歩一歩進んでいる。

「幸せ」って一体何だろう？

えざわ　きよし　　[初稿：2018/12/05; 改訂１：2019/01/05;
改訂２：2019/12/07; 改定３：2020/10/17]

「幸せ」って一体何だろう？

ぽん酢しょうゆのある家（うち）（笑）？
[注：昔、明石家さんまさんの出てたキッコーマンのCMから]

靴下をぶら下げて、サンタさんが来るのを期待しながら、1人ベッドで眠る事？
あばら家の土間のむしろの上で、愛情たっぷりの両親に抱かれて眠る事？

パーティーで、仲の良いお友達に、誕生日を祝ってもらう事？
学校で、将来のために、読み書き計算を習う事？

キャンプ場のテントの中で、気心知れた仲間達と、悩みや夢を語り合う事？
友情を裏切って、「憧れのあの人」と結ばれる事？

厳しい受験地獄を乗り越えて、志望校に合格する事？
受験はせずに、夢を追い求めて、自分ならではの道を歩む事？

日々の死ぬ様なハードトレーニングに耐えて金メダルを獲得する事？
仲のいい仲間達と毎晩ワイワイ楽しく飲み明かす事？

素敵な伴侶と一緒になって生涯寄り添う事？
誰にも縛られない悠々自適の独身生活を満喫する事？

毎日上司に叱られながらも一生懸命働き、念願の一軒家を手に入れる事？
静かな森の中のあばら家で、草木や動物に囲まれて心豊かに暮らす事？

順調に「出世の階段」を登りつめ、分刻みのスケジュールを毎日せわしなくこなす事？
愛する人との子供を授かり、ゆったりと慈（いつく）しんで育（はぐく）む事？

日々ストイックな努力を長年積み重ねて文化勲章やノーベル賞を受賞する事？
寒い冬空の下、公園で仲間達と肩を寄せ合いながら熱々の鍋を頬張る事？

春、桜の木の下でみんなで楽しく花を愛でる事？
夏、好きな人と綺麗な花火に見とれる事？
秋、ピクニックに出かけて野山で紅葉を堪能する事？
冬、温泉に浸かって熱燗をキューッと一杯やる事？

盆と正月に、「目に入れても痛くない」孫と再会する事？
陽だまりの中、一人静かに読書や物思いに耽る事？

愛する人たちに囲まれながら、病床で穏やかに息をひきとる事？
誰の世話にもならずに元気に生きて、ある日突然コロリと逝く事？

、、、人は皆、幸せになりたいけれど、
「幸せの方程式」に唯一絶対の解など存在しない、、、

もし、
確かな事があるとするなら、
恐らくそれは「心の持ち様（よう）」：

他の人が何と言おうと、
周りからどう見えようと、
本人が心の底から
「幸せ」と思えば幸せだし、
「不幸」と思えば不幸なのだ！！

もう一つ言える事は、
「欲を言い出したらキリがない。」
（だから、（希望や願望も含めて）「望み」を抱くのは
一生のうちせいぜい３つに留めておけ！）：

往往にして、
「隣の芝は青く見える」ものであるが、
実は、当の「隣人」はそれほど幸せではないかも知れない、、、。
（特に、他人の幸せを故意に妨害する様な輩（やから）はまず間違いなく不幸せだし、
真に幸せな者は自らの「幸せ」を見せびらかしたり
自分の「幸せの形式」を他人に押し付けたりはしない。）

だから、
周りの動向や意見にあまり惑わされる事なく、
自分自身の思い描く「幸せ」を追求していけばいい、、、；
、、、それが「身の丈」であるか「遥か遠く」であるかは、個人の自由だ。

（ただし、他人にできるだけ迷惑をかけない範囲でね♡
また、「遥か遠く」になればなる程、
「つかみ取れない」リスクも増す事は覚悟しておくべきだ。）

、、、人生、一度きりなのだから、自分で納得できる様に生きて行きたいものである、、、

エピローグ：遺（のこ）されたあなたへ
ーーそんなに泣かないでーー

えざわ　きよし　[初稿：2018/12/18；
改訂１：2019/08/31；
改定２：2020/10/17]

ねえ、そんなに泣かないで、、、
出会いがあれば遅かれ早かれ
別れは必ず訪れるのだから、、、

どうせいずれ別れなければならないのなら、
涙顔ではなくて笑顔で別れようよ！
ほらっ、「笑う門には何とやら」ってよく言うじゃない (^_^)

ねえ、そんなに泣かないで、、、
僕は僕なりの人生を
精一杯生きたのだから、、、

楽しい事よりも辛い事の方が多かったし、
思い通りにならない自分自身を恨んだ事もよくあった。

それでも、
毎日を必死に今日まで生きることができたのは
君らの支えがあったお陰だと知っている。

だから、君には心から感謝してるよ (^_^)

、、、君と出逢えて、本当に僕は幸せだった、、、

振り返ってみると、
大事な時にはいつも誰かが側（そば）にいてくれた：

寂しくってどうしようもなかったあの夜、
人生に悩んで途方にくれてたあの日、
そして、とてつもない不安や恐怖に怯えていたあの時、、、

そんな時、君らが側にいてくれたお陰で
僕は再び一歩踏み出すことが出来たんだ！
本っ当〜〜〜にありがとう m(_ _)m

でも、そんな僕の命の灯火（ともしび）も、
今まさに消えようとしている、、、

これから
僕の身体は燃え尽きて灰となってしまうけど、
僕の魂は煙とともに天に昇り、
やがて数多（あまた）の雨粒と共に降り下りて大地に沁（し）み渡る。
そして、
君のことを傍（かたわ）らでずっと見守っているよ (^_^)

だから、ほら、涙を拭いて！
１日１日を無駄にする事なく
僕の分までしっかり生きてね！！

でもね、
生きるのがど〜〜〜してもしんどくなったら、
無理し続けなくったって良いんだよ (^_^)
その時は、あっちで一緒に笑いながら
思い出話を語らい合おうよ。

では、
先に逝ったみんなが待ちかねている様だから
そろそろ僕もあっちへ行くね (^_^)
お願いだから、
どうか、そんなに泣かないで下さい、、、

エピローグ：遺（のこ）された君へ（続）
ーーそんなに自分を責めないでーー

江澤　潔　[初稿：2019/05/13]

きっと今、君はこう思っているだろうね、

ああ、どうして僕のためにもっと何かしてやれなかったんだろう？

なんて、、、。

君が僕のことをそんなに思ってくれて
僕は本当に幸せだよ。(^_^)

でもね、そんなに自分を責めないで！！
世の中にはどうにかなる事よりもどうにもならない事の方が多いのだから、、、

実際、かつて西田幾二郎も言った様に、
一個の人間が「他人の命を救ってやる」なんて考えた時点で、
その人は既に「奢っている」んだよ、、、

もっと、自分のおかれた状況と自分の能力を客観的に把握した上で、
自分ができる事とできない事を冷静に考えて行動してね。
そうすれば、
ちょっと困っている人を助けてあげるくらいは出来ると思うよ。(^_^)

僕は、人生において本当に大事なのは「いかに長く生きるか」ではなくて、
「いかにその時その時を一生懸命生きるか」だと信じていたし、
それに従って生きてきたつもりだ。
だから君も、今の一瞬々々を大事に生きてね！！
いつか再び会えた時に、
お互いの人生を笑って振り返られる様に、、、。

くじけそうになる時もあるかも知れないけど頑張ってね。
、、、僕はいつでもそばで君のことを見守っているから、、、

末筆ながら、
僕のことをそれ程まで思ってくれて本当にありがとう。(^_^)
でも、お願いだから、
どうかそんなに自分を責めないで下さい、、、

付録１：替え歌集

サンマが食いてえ

［「薔薇が咲いた」（作詞作曲：浜口庫之助）の替え歌]
えざわ　きよし　[初稿：2018/11/18; 改訂１：2018/12/29]

１、
サンマが食いてえ　サンマが食いてえ　美味しいサンマが
秋になったら　プリプリ太った　サンマが食いてえ

サンマが食いてえ　サンマが食いてえ　美味しいサンマが
香ばしく　焼きあがった　サンマが食いてえ

サンマよサンマよ　美味しいサンマよ
僕の腹を　美味しく満たしておくれ

サンマが食いてえ　サンマが食いてえ　美味しいサンマが
秋になったら　プリプリ太った　サンマが食いてえ

２、
ブリが食いてえ　ブリが食いてえ　美味しいブリが
冬になったら　脂ののった　ブリが食いてえ

ブリが食いてえ　ブリが食いてえ　美味しいブリが
アツアツに　煮込まれた　ブリが食いてえ

ブリよブリよ　美味しいブリよ
大根と一緒に　お腹（なか）を満たしておくれ

ブリが食いてえ　ブリが食いてえ　美味しいブリが
冬になったら　脂ののった　ブリが食いてえ

３、
アサリが食いてえ　アサリが食いてえ　美味しいアサリが
春になったら　深川の　アサリが食いてえ

アサリが食いてえ　アサリが食いてえ　美味しいアサリが
ご飯と一緒に　炊き込まれた　アサリが食いてえ

アサリよアサリよ　美味しいアサリよ
その風味で　僕を満たしておくれ

アサリが食いてえ　アサリが食いてえ　美味しいアサリが
春になったら　深川の　アサリが食いてえ

４、
カツオが食いてえ　カツオが食いてえ　美味しいカツオが
初夏になったら　活きのいい　カツオが食いてえ

カツオが食いてえ　カツオが食いてえ　美味しいカツオが

藁（わら）と一緒に　炙（あぶ）られた　カツオが食いてえ

カツオよカツオよ　美味しいカツオよ
日本酒（ポンシュ）と一緒に　僕を満たしておくれ

カツオが食いてえ　カツオが食いてえ　美味しいカツオが
初夏になったら　活きのいい　カツオが食いてえ

バブルを知らない子供達

［「戦争を知らない子供たち」
（作詞：北山修、作曲：杉田二郎）の替え歌]
えざわ　きよし　[初稿：2018/12/28; 改訂１：2018/12/29;
改定２：2019/01/24; 改定（解説）：2020/10/18]

１、
バブルがはじけて　僕らは生まれた
バブルを知らずに　僕らは育った
大人になって　歩き始める
「さとり」の歌を　口ずさみながら

僕らのやる事　干渉しないで欲しい
バブルを知らない　子供達さ

２、
知らなさ過ぎると　揶揄（やゆ）されるなら
頑張らな過ぎると　どやされるなら
今の私に　残っているのは
論理と多様性を　訴える事だけさ

僕らの成す事　見ていて欲しい
バブルを知らない　子供達さ

３、
「良き日」の「幻影」に　囚（とら）われないで
現実を直視　できる人なら
誰でも一緒に　悩んでゆこうよ
日本の、人類の　未来の事を

僕らのやる事　干渉しないで欲しい
バブルを知らない　子供達さ
僕らの成す事　見ていて欲しい
バブルを知らない　子供達さ

解説：
（ちょっと、「ゆとり世代」「さとり世代」等の年代、特徴、等々
がゴッチャになってしまっていて恐縮ですが、）
私は、はっきり言って、「バブルを知らない世代」に期待しています！！

何故なら、
それ以前の世代はどうしても
高度経済成長期やバブルの絶頂期等、**「古き良き日」の「幻影」**に
未だに囚われ続けてしまうからです。
[
その良い例が、旧態依然の経済推進政策をゴリ押しする類の政策です。
、、、こんなのはまず成功する訳なく、
ただ、国家財政をより窮地に追い込むだけでしょう；
何故なら、
原理的に「もはや」無理だと分かりきっている事を無理に続けているからです。
（そう言う意味では、アメリカのトランプも同じ。）
、、、**今、全人類に必要なのは、「見事に統制された撤退戦」です。**
]

、、、この様な「幻影」に囚われない「バブルを知らない世代」には、
日本、あるいは全人類、を救うための、
もっと根源的かつ抜本的な施策・政策を考案・実行できる筈だと
私は信じています。

そこで大事なのは、（必ずあるであろう）「バブルを知る世代」からの
（例えば「経済成長を重視せよ」と言う様な）
時代遅れの「成功体験」に縛られた「アホな干渉」を**振り切る**事です。
[
ただし、（バブル崩壊など）当時の失敗に対する教訓は傾聴に値するかも知れません。
]

「バブルを知らない世代」が日本、そして人類の「救世主」となる事を願っています。

Good Luck!!

「モテ季」を知らない男たち

[「戦争を知らない子供たち」（作詞：北山修、作曲：杉田二郎）の替え歌、第二弾]
えざわ　きよし　　　[初稿：2019/12/13; 改訂１：2019/12/18]

１、
取り柄もなしに　僕らは産まれた
「モテ季」を知らずに　僕らは育った
大人になって　気づき始める
「みんな　平等」なんて　まやかしだろうと

僕らにもチャンスを　与えて欲しい
「モテ季」を知らない　男たちさ

２、
「キモい」と言われて　避けられるなら
「ウザい」と言われて　嫌われるなら
今の私に　残っているのは
オタクの道を　進むことだけさ

僕らにも彼女を　授けて欲しい
「モテ季」を知らない　男たちさ

３、
見せかけばかりに　囚（とら）われないで
内面の良さで　判断できる
そんな女性（ひと）に　会える時まで
自分の内面を　磨いてゆこうよ

僕らにもチャンスを　与えて欲しい
「モテ季」を知らない　男たちさ
僕らにも彼女を　授けて欲しい
「モテ季」を知らない　男たちさ

[解説]
なんだか、
かなり（過去の）自分の境遇と心情がこもっている様な、、、。(^^;)
まあ、今となってはどうでも良い事だけど、
若い頃は本気で悩んだな〜、、、。(^^;)

まあ、皆んな、そんなに気にするな、、、。
人生、女ばかりがすべてじゃないさ。(^_^)

Good Luck!!

木綿ごしのTO-FU-（豆腐）

[『木綿のハンカチーフ』（作詞：松本隆；作曲：筒美京平；
編曲：筒美京平、萩田光雄；歌：太田裕美）の替え歌]
えざわ　きよし　[初稿：2019/12/18; 改訂１：2019/12/21;
改定２：2020/10/17]

１、
恋人よ　僕は旅立つ
東へと向かう列車で
豆腐屋のもとで　豆腐の作り方
学ぶ　学ぶつもりだ
いいえ　あなた　私は
豆腐が好きじゃないの
ただ豆腐屋の絵の具に
染まらないで帰って
染まらないで帰って

２、
恋人よ　半年が過ぎ
会えないが泣かないでくれ
こちらで流行りの豆腐を送るよ
君の口にも合うはずだ
いいえ　絹ごし豆腐も
もちもちゴマ豆腐も
きっと　あなたのキスほど
美味しいはずないもの
美味しいはずないもの　（<= 結構肉食系 (^^;)）

３、
恋人よ　今も田舎で
肉中心の食事のままか　（<= ひょっとして、狩猟採集民？ (^^;)）
僕が丹精　込めて作った
豆腐　豆腐を　見てくれ
いいえ　鹿を狩（か）ってた　（<= ハイッ、決定！ (^^;)）
あなたが好きだったの
でも底冷えの厨房（ちゅうぼう）
からだに気をつけてね
からだに気をつけてね

４、
恋人よ　君を忘れて
変わってく僕を許して
毎日修行に　明け暮れる厨房（ちゅうぼう）
僕は　僕は帰れない
あなた　最後のわがまま
贈り物をねだるわ
ねえ　濃密な木綿で
漉（こ）した豆腐下さい
漉（こ）した豆腐下さい

[コメント]
う〜ん、何だか単なる肉食系女子と真面目に修行に打ち込む青年との
「すれ違いの恋」の歌になってしまったな、、、。(^^;)
安珍と清姫の物語にも通じるところがあるかも知れない、、、。

[
しかし、彼女が「嫌いだ」っちゅうとるのに
何度も豆腐を勧める青年のなんと愚かなことよ、、、。(^^;)
人（特に男）は一旦何かに夢中になると、
周りが見えなくなるものである、、、。
、、、この辺は元歌に通づるかもしれない。
]
[
まあ、彼女の方もかなり無茶ぶりしているが（特に１番）、、、(^^;)
]
[
なお、「この田舎には豆腐屋の一つもないんかい？」
というツッコミは無しね♡
]

付録２：辞世の句+

辞世の句+（プラス）

[初稿：2019/12/13; 改定１：2019/12/14; 改定２：2019/12/15;
改定３：2019/12/16; 改定５：2019/12/19; 改定６：2019/12/23;
改定７：2019/12/27; 改定８：2019/12/29; 改定９：2019/12/31;
改定１０：2020/01/05; 大改訂：2020/10/18]

１、
振り返れば　随分（ずいぶん）遠く　歩みけり、、、
　、、、あと、願わくは　「続く者」達、、、

２、
何故ヒトは　そんなに他人（ひと）と　競（きそ）いたい？
　、、、地球なければ　意味がないのに、、、

[補足：
　(a) 何故ヒトは　そんなに金を　稼ぎたい？
　　、、、地球なければ　意味がないのに、、、

　(b) 何故ヒトは　そんなに長く　生きたがる？
　　、、、国家なければ　意味がないのに、、、
]

[[おまけ （ほとんど標語 (^^;) ）]]

(i) **気をつけよ！　「優しい嘘（うそ）」も　嘘は嘘**
　「酷（むご）い事実」が　より為（ため）になる

(ii) 栄えても　いつか必ず　人は死ぬ
　ならば地球に　負担かけるな！！

(iii) 宗教や　立派な思想を　掲げても
　結局「欲」が　争いの元凶（もと）

(iv) **科学技術や　産業を発展　させるより**
　「欲」制してこそ　『万物の霊長』

[（補足）　環境を　壊して「経済　　成長」と
　　　　　　　　喜ぶ奴ら　頭（あたま）悪すぎ]

(v) 経済成長　いつまでも続く　筈（はず）がない
　「夢」から醒めよ！！　学者・政治家

[注：
ここでの「学者」は、主に
（特に政府御用達の）政治学者や経済学者を指す。
]

(vi) 枠組みが　既に崩れて　いるけれど
　　「資本主義」に拘（こだわ）る　アホな指導者

(vii) **有限な　地球のことを　考えて**
　　いざ踏み出そう！！「社会縮小」

(viii) **人類は　地球上に　溢（あふ）れてる！！**
　　今手を打たねば　手遅れになる！

(ix) 事故・災害、　一旦（いったん）起これば　現実だ
　いい加減に捨てよ！　「正常（性）バイアス」

(x) **「対岸の　火事だ」と油断　すべからず**
　　「明日は我が身」と 心得（こころえ）備えよ

(xi) この地球　人類だけの　ものじゃない
　尊重しよう　他生物の暮（く）らし

(xii) 「分断」を　くい止める為　するべきは
　自己主張より　相手の理解

[注：
ここで言う「理解」とは、
ただ表面的に相手の主張を理解しようとすることではなく、
相手の歴史・文化・社会等の背景をしっかり理解した上で
相手の立場に立って深く考察することを意味する。
とりわけ、強者が弱者を理解することが肝要だと思う。
]

(xiii) **各々（おのおの）に　天が定めし　「死に時」を**
逃（のが）してしまうと　只（ただ）悲惨なり

(xiv) GDP もう国民の　幸せを
反映（うつ）してないのに　拘（こだわ）る政府

(xv) 「和」の「空気」　これぞ「いじめ」の　根源だ！
進めよ！！「個」の尊重　と「弱者」理解

[（補足）　{世の中, 学校}に　不満あるなら　「いじめ」るな！
すべきは直訴、　{社会, 学校}変革　]

(xvi) **もう止（や）めよう！　{ 国家, 団体 } 同士で　競（きそ）うのを！！**
今から意識は　「地球市民」！！！

(xvii) 「標準化」　からの脱却、　多様性、
日本の未来を　救済するカギ

[（補足）西洋を　手本としてきた　日本だが
そんな時代は　とうに終わった　]